

# 児童養護施設に入所している子どもたちの心のケア

— 集団音楽療法のアプローチを通して —

藤本 勝彦 山内 美穂  
(和泉 幼児院)

## <要旨>

児童養護施設に入所中の2才児クラスの幼児を対象に、心理的援助を目的とした集団音楽療法アプローチを行った。親役の協力スタッフと共に参加することで、幼児の特定の協力スタッフに対する愛着の形成が見られた。同時に攻撃的行動が認められたが、集団の中での個別的な関わりによって、不快な感情を表出し、なだめてもらう経験を子どもに提供することは、大人への信頼感を育て、心理的援助としての効果があると考えられた。音楽による場の一体感の得易さや合目的な身体接触も愛着形成を促すと考えられた。また低年齢を対象とした小集団での関わりは、年齢相応の一般的な体験の提供であると共に、個別の心理療法への導入的役割も果たしうるのではないかと考えられた。

## <キーワード>

養護施設、集団音楽療法、心理的援助、愛着

### 1. はじめに

近年、児童虐待が著しく増加している。このことに比例するように、虐待を受けた子ども達の受け皿である児童養護施設に被虐待児の入所が増加している。大阪府子ども家庭センター（児童相談所）の統計によると平成12年3月末日における児童養護施設の在籍児童数は1,663名であり、その内被虐待児は414名在籍している。被虐待児の全体に占める割合は24.9%に上り、児童養護施設に入所している児童の4人に1人は被虐待児ということになる。

虐待を受けた児童は、その程度の差はあるが、いずれも身体や心に深い傷を受けており、施設生活の中で対人関係を中心としたさまざまな不適応行動を現してくる。社会的な自立を目標とし、しつけを柱としたこれまでの児童養護施設の機能役割に『心の癒し、心のケア』といった治療的な概念が新たに加わってきている。

当院は、全国的にも数少ない幼児（2～6歳）のみを対象とした児童養護施設であり、平成12年度の入所理由をみても、虐待7名（全体の

24.1%）、家出2名（6.8%）、入院9名（31%）、拘禁2名（6.8%）等となっており、それらが示す通り、多くの児童は幼いうちに保護者から不適切な関わりを受けてきたり、あるいはほとんど関わりを受けずに入所してきている。すなわち、児童の人格形成の上で最も基本となる愛着関係が形成されていない状況での入所であり、必然的に施設での援助内容の基本となるものは児童と保育士との愛着形成にある。然るに、集団生活を旨とする施設養護において保育士と児童との個別的、親密的な関係を形成していくことは物理的にも非常に困難といわざるを得ない。

厚生労働省では、平成11年度より被虐待児が10人以上在籍している児童養護施設に非常勤の心理職の導入を制度化した。しかし具体的な心理的援助プログラムやメニューについては試行錯誤の状態、何が児童にとって望ましい援助であるか十分議論しないまま今日に至っている。

当院では、先に述べたとおり愛着形成のうえでより望ましい年少幼児（被虐待児を含む）を対象として集団音楽療法のアプローチを通して

児童への心理的援助を実践することにした。

## 2 目的

施設入所幼児と親役を勤める協力スタッフが一緒に集団音楽療法に参加することにより、幼児の愛着と信頼感の形成をはかり、今後の心理的援助の基礎データとする。

## 3 方法

(1)対象 2才児クラスの幼児（開始時平均年齢2才6ヶ月、入所平均年齢1才3ヶ月）。開始時は10名（男児5名、女児5名）だったが途中入所の当該児（男児1名）があったため、10月にグループ替えを行い、後期は計11名を対象として実施した。入所理由としては、虐待1名、家出4名、入院1名、その他5名であった。

(2)期間 前期：平成12年4月～9月

後期：平成12年10月～平成13年3月

(3)構造 対象児を2グループに分け、対象児5名（後期1グループのみ6名）と協力スタッフ5名（男性2名、女性3名）を1グループとした。進行とキーボードはセラピスト1名が担当。週1回50分、生活棟とは別棟の事務棟の一室で実施した。内容的にはリトミック・プログラムをベースにした音楽によるプレイセラピーである。枠組みを明確にするために、セッションの始まりと終わりには同じ歌を使用、基本的な全体構成は毎回同じとした。また前期、後期とも初回到セッションの期限を告知してから開始した。記録は行動観察とビデオ録画（固定カメラ）によって行った。

尚、協力スタッフは社会福祉および保育専攻の学生である。

## 4 結果

本セッションは前期(第1～21回)・後期(第22～38回)の計38回実施された。

幼児は初期の段階(第1～4回)で、特定の協力スタッフを選択していることが観察された。特定の協力スタッフとの間での受動的な抱っこから能動的な抱きつき、一定のラポールが形成されたことによる愛着行動とスタッフの行動模倣、次いで特定の協力スタッフを起点とした探

索的な行動が展開され、次第に他児や他の協力スタッフへの働きかけの出現、といった行動の変化が前期前半中に見られた。これらに伴いセッション全体への参加も可能になり、他児の行動の模倣やセッション参加への選択的行動など、自発的な行動の増加が観察された。

多くの幼児(8名)に程度の差はあるが攻撃的行動が見られ、前期後半は特に攻撃的行動と多動的な動きが多く観察された。後期になると身体的な攻撃行動は多少減少し、言葉による要求が増加、大声を出したり、汚い言葉を口にしたりする行動も見られた。

攻撃的行動を示さなかった幼児(3名)は、協力スタッフとの個別の関わりを好んで離れようとせず、移動時には協力スタッフを連れて行くという行動が見られた。入所理由としては虐待(ネグレクト)と家出で、家出はネグレクト傾向を伴うものであった。

このうち女児2名については、長く男性協力スタッフに対する強い抵抗が観察されたが、後期には女性協力スタッフを介してであれば交流できるように変化した。なお初期においては男児にも同様に男性協力スタッフに対し、警戒した態度が観察された。

前期終盤から後期には、要求が妨げられた場合に拗ねる行動や時間中に眠る、帰り渋りが全体的に観察された。またスタッフに盛んに喋り掛ける行動がよく見られた。

グループ替えを行った後期初回には幼児達に戸惑いが見られたが、2回目から特に変化は見られなかった。グループ間の差は特に観察されなかった。

## 5 考察

### (1) 集団内の個別的関わり的重要性

養護施設入所児の行動特徴のひとつとして無差別的愛着行動があげられるが、今回の定期的な関わりによって、特定の協力スタッフに対し安定した愛着を示すことが多く観察された。それに伴い、セッション自体への参加が可能となることが観察された。これは対人関係の基本が母子関係に代表される2者関係であることが関係していると考えられた。同時に対象が2才ク

ラスで、一般的に個別から集団への遊びに移行していく時期であることが、親役の協力スタッフとの個別の関係から集団全体との関係へと、対人関係の発展を促している可能性が考えられた。

グループセッションの意義としては、Yalom や Slavson のいう人間関係の学習や原初的家族関係の修正的反復、希望の注入などグループセラピーの治療的有効性を挙げることが出来る (Gil, 1991 ; 山口他, 1987)。また他児の存在によって幼児に安心感を与え、協力スタッフを選択する余地が得られることが挙げられる。この余裕によって関係を発展しやすくするには、物的な保障として協力スタッフが幼児と同数または1、2名多いことが適切ではないかと考えられた。

Lowrey は集団精神療法が効果を生むのは、治療集団の構造が家族に似ているためであると述べている (宮内他, 1987) が、今回の集団音楽療法においても協力スタッフに男女が含まれていることが好ましいと考えられた。女兒の中には男性協力スタッフに対する強い抵抗を示す児がいたが、これは日頃、成人男性に接する機会が少ないことも一因であるのではないかと考えられた。尚、幼児から攻撃的行動を受けるのは男性の方が多く観察された。これは幼児にとって女性よりも未知の存在である男性に対するリミット・テストイングとも、協力スタッフ側の性別による反応性の違いに幼児が触発されたものとも考えることが出来る。いずれにせよ日常、女性保育士に多く接している中で男性協力スタッフとの接触は、幼児らにとって本来与えられるべき経験であるとともに、男児にとっては男性性モデルを得る一機会として、活発な身体的運動を共有してくれる掛け替えのない相手として重要であると考えられた。

これらのことから幼児の集団音楽療法参加条件として、個別的な人間関係の提供が必要であることが示唆された。

## (2) 愛着と攻撃性

愛着関係が形成されると共に、攻撃的行動も多く観察されたが、この攻撃的行動は2種類に分けて考えられた。ひとつは自分の行動・要求

を妨げられたことに対する問題解決行動としての攻撃であり、もうひとつは悪戯も含めた、愛着関係の確認としての攻撃である。

感情の起伏が激しく、要求を妨げられることに対して激しいかんしゃく行動や、スタッフの些細と思える要求阻止や対応によって、嘔吐、怒鳴るなど高い攻撃性が観察されたが、特に高い攻撃性を示した幼児は1名のみであり、この児には無差別的愛着傾向とディタッチメントも観察された。

一方、相手の反応を伺いながら叩く、唾を吐く、嘔吐等の攻撃的行動を取りながら、急に抱きつく等の相反する行動が多くの幼児に観察された。攻撃性と甘えが同居した両面的な態度はスタッフを戸惑わせるものであったが、その表情、態度等行動全体には強い甘えが感じられた。後期後半になると攻撃的な態度を取りながらも、セッションの流れに参加するといった行動変化が見られた。次第には単に攻撃的行動だけでなく、拗ねる行動が観察された。拗ねる行為は甘えに基づく表現である。後期になると感情を爆発させ、直接的攻撃行動に出る事が減少したことを考え合わせ、拗ねた後、周囲からなだめてもらう経験は、被虐待児に見られる感情調節能力の障害を少しでも防ぐものと成りうるのではないかと考えられた。後期には幼児の盛んな発言も聞かれたが、多くはジャルゴンであり、周囲は意味を理解しがたいものであった。しかしスタッフの同意を得ると幼児は満足した表情を見せており、スタッフはまさに親が幼児に対して行うのと同じ事を行っていたといえるであろう。これは被虐待児に限らず感情コントロールのための言語化取得の援助として、言語そのものの発達援助の意味も含んでいると考えられる。

西澤 (1999) は治療的關係における子どもの変化を、①警戒、②リミット・テストイング、③甘え (退行現象)、④虐待体験の再現、としているが、今回「警戒」は先ほど述べたように、主に男性に対して観察された。セッション自体への「警戒」が低かったのは、実施場所が生活圏ではないにせよ施設内であったためと考えられた。「リミット・テストイング」と「甘え」では、児によって同時、または甘えが先に観察された。

ただ甘えの形であっても、子どもはスタッフに対してリミット・テストングを行っているのではないかと考えられた。ここには対象児の年齢の影響が考えられ、「抱っこ」に対する要求の高さが攻撃よりも先に甘えの形での表現となるのではないかと考えられた。実際、初期においては「抱っこ」を求めるものの、協力スタッフとの間に距離をとっており、この距離は甘えたい欲求と相手に対する信頼感との狭間で揺れる子どもの心理的な距離であると考えられた。一方、前期後半以降に見られたジャンプしてスタッフの胸元に飛び込んでくる行動は、相手が自分を受け止めてくれるものとしてある程度スタッフが幼児に認められた結果であると考えられた。依ってこれらも「甘え」ではあるが、幼児が時間中に眠ったり、じゃれついたりする態度がより退行的な「甘え」ではないかと考えられた。今回、被虐待児及び虐待的傾向にあった児に攻撃的リミット・テストングは観察されず、対人関係への消極性や堅さが見られた。これは虐待内容がネグレクトであることと関連すると考えられる。「虐待体験の再現」についても明確に捉えられるものは不明で、同様の理由が考えられた。個別に心理的援助の介入が必要ではないかと思われる場面は見受けられたが、本集団の中で個別的介入を即時に行うことは構造的に困難であった。どのような形での介入や援助が望ましいかについては今後の課題である。

### (3) 音楽の役割

音楽は幼児とスタッフとの関わり合いの媒体として利用されたが、通常のプレイセラピーとは異なり玩具のないことが、単に「抱っこ」に留まらず手遊び等目的的身体接触を生じやすくし、愛着形成を促進する効果があったのではないかと考えられた。また遊びの発達の間から考えると、玩具を用いる前に反復自己刺激、次いで大人が玩具代わりとなつての身体を用いた遊びの段階があるが、音楽はより退行した水準での集団凝集性を高めやすい性質を有している(松井,1987)ことから、再度この時期を積極的に過ごすことで、次の「遊び」の段階への移行を容易にし、更に抽象的概念操作へと発達を促すのではないかと考えられる。

対象児には虐待が入所理由でなくとも、大人によって虐げられた経験を持つものも多い。そのような幼児にとって協力スタッフと音楽を共有し、受け入れられ、大切にされたという実体験を得ることは、「抱っこ」に代表される直接的・身体的な holding だけでなく、場としての holding を体験しやすくするのではないかと考えられ、今後の安定した愛着関係を形成していく上でのベースとなっていくことが考えられた。この場の一体感の得易さも音楽の持つ特徴の一つとして挙げられよう。

本来、最も養育者の庇護を要する時期に養護施設で集団生活を送らなければならないことは、ややもすると心理的発達の基礎となる基本的信頼感を獲得することが難しくなる可能性を有している。同時に低年齢での入所は、年齢相応の一般的な生活・活動の経験取得も困難にする。この経験を提供することは、心身の発達において良い影響を及ぼすのではないかと考えられた。しかしこれらが生活場面においてどのように反映されていくかは長期的な観察を必要とし、その評価法と合わせて今後の課題と考えられる。

またこの対象年齢は、個人の能力差が大きく、個別の心理療法への導入が可能かどうかの評価を行う必要があることから、心理療法へ向けての導入としての役割も果たしうるのでないかと考えられた。

### 参考文献

- Gil,Eliana 1991 The healing power of play : Working with abused children(西澤哲訳 1997 虐待を受けた子どものプレイセラピー 誠信書房)
- 西澤哲 1994 子どもの虐待 誠信書房
- 西澤哲 1999 ト라우マの臨床心理学 金剛出版
- 松井紀和 1987 音楽療法 山口隆、増野肇、中川賢幸編 やさしい集団精神療法 星和書店 pp.204-216.
- 宮内和端子、藤岡邦子、川田行雄 1987 児童の集団精神療法 山口隆、増野肇、中川賢幸編 やさしい集団精神療法 星和書店 pp.321-342.